霧島市の文化財 vol.2

国史跡 大隅正八幡宮境内及び社家跡

所在地：鹿児島県霧島市隼人町内 2496-1（鹿児島神宮）ほか 74 筆
指定日：平成 25 年（2013）年 10 月 17 日

大隅正八幡宮は霧島市隼人町内に鎮座する鹿児島神宮のことです。鹿児島神宮は平安時代中期に編纂された『延喜式』に「鹿兒島神社」の名で、大隅・薩摩・日向の中で唯一の大社として記載されています。

応徳 4 年（1087）頃には八幡神が祭られるようになったと考えられ、大隅国衙（大隅国の役所）と結びつきを強めて社領（神社の領地）を形成・拡大し、社家（代々神社を支える家）の組織が整備されました。そして、その過程で「大隅正八幡宮」などと呼ばれるようになり、大隅国の一宮として保護されるようになったと考えられています。

平安時代後期から勢力を拡大し、建久 8 年（1197）の『建久図田帳』によると、大隅国の約 3,000 町の田のうち、正八幡宮領は約 1,296 町に及んでいます。その後、蒙古襲来に際して、蒙古退治の祈祷を行い、『今昔物語集』などにみえる、「八幡神の起源は正八幡宮である」という主張をすることなどを通じて、多くの領地が寄進され、それを基に社家や御家人の館、寺院などからなる「宮内」という都市を形成し、整備されました。

宮内には別当寺（神社を管理する寺）も含めて多くの神官や僧侶が居住し、明治維新時の記録では、110 ほどの家があったとされ、中でも桑幡・留守・沢・最勝寺の四社家が、社家を統括する立場にありました。

旧隼人町や霧島市によって実施された発掘調査により、鹿児島神宮の境内や四社家の館跡から中国製の青磁、白磁、青花といった磁器や陶器、タイ産の壺などが出土しています。また、鹿児島神宮には 14 世紀から 15 世紀前半の中国やタイの陶磁器が所蔵されていることから、鎌倉時代から室町時代にかけて、正八幡宮が中国や南方の文物を安定して入手できる立場にあったことが分かります。さらに史料からは、宇佐八幡宮（宇佐神宮）や石清水八幡宮、京都、鎌倉などとの交流もうかがわれるなど、正八幡宮が異文化交流の重要な役割を果たしていたことが分かります。

現在の霧島市立宮内小学校にあった別当寺の弥勒院跡では、池の跡や柱の跡などがみつかっています。また、全国的にも珍しい中国・元代の飛青磁と呼ばれる磁器が出土しています。発掘調査の結果、11 世紀頃には寺院があったと考えられています。

四社家の館跡は、規模はそれぞれ異なるものの、中世前期には館が築かれ、中世後期には土塁や堀に 囲まれたと考えられます。出土した遺物からも国内外との交流があったことがうかがわれます。

このように、大隅正八幡宮や弥勒院、四社家は史料や出土遺物から、京都や鎌倉、琉球や東南アジアとも交流を行う異文化交流の場として機能していたことが分かり、中世都市の形成事情や過程を知る上でも重要であることから、国の史跡に指定されました。

今も鹿児島神宮の「扁額」で正八幡宮であった名残りが確認できます！

2023 年 5 月 12 日初刷　霧島市教育委員会